

学校向け学習支援事業の新しい試み

福士道太

A Report on New Learning Support for School

FUKUSHI Dohta

キーワード: 学習支援, 出前授業, 学校教育, 小学校, 社会, 自然観察, 遠隔授業

1 はじめに

昨今学校では、より一層地域に根差した学習や児童・生徒の実態に即した学習の実践が求められており、学習内容及び学習形態は多様化している。また、令和2年度から完全実施となる新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」が提唱されており、その実現の方策の一つとして、資料を活用した情報の収集や鑑賞等の学習活動のために、地域の図書館や博物館、美術館等を活用するという文言が新たに追加されている。このような背景から今後、学校の博物館へのニーズや期待は、一層高まってくることが予想される。

当館で実施している学校向け学習支援事業である「出前授業」は、教科書で取り上げられている単元をベースとして学習内容を設定している。例年80件前後の実績があり一定の好評も得ているが、学校事情を踏まえ、既存プログラムの工夫・改善とともに新たな教材・授業の開発をしていく必要もある。

今回は、今年度新たに試みたプログラムである自然観察をベースとした地域学習の出前授業、そして学校と当館をインターネットで結んで学習する遠隔授業の実践について報告する。

2 地域の自然観察をベースとした地域学習の出前授業

(1) テーマ設定

対象校である鶴田町立水元中央小学校からは、自分たちの学校の地域について学び、子どもたちに地域への愛情や誇りをもって欲しい、また学習の場を町内の「つがる富士見湖パーク」にして、実感の伴った学習にしたいという要望があった。そこで、テーマ設定は園内を散策しながら自然観察することをベースとして、「つがる富士見湖パーク」に生息する植物や動物の特徴について解説し、加えて富士見湖の成り立ちや周辺地域にかかわる歴史についても一部取り上げ、総合的に学べるように授業を構成した。

(2) 指導上の留意点

子どもたちの生活圏にある地域を教材化することは、自然事象や社会事象への興味・関心を引き出しやすい。また、野外活動はそれ自体に楽しみがあり、意欲的に学ばせることができるなどのメリットが多数ある。特につがる富士見湖パークは、学校のみならず家庭や地域の活動において訪れている子どもたちにとって身近な場所である。

一方で子どもたちが、園内の動植物を観察したり湖の成り立ちについて学んだりする機会は、ほとんどなかったという。見慣れ、行き慣れた場所であっても、動植物や文化資源についてわからないことが多いという実態があった。

そこで、子どもたちと一緒に園内を散策しながら、生息している主な動植物について、提示した写真資料を元に見比べながら観察し、それらの特徴を捉えるとともに、一部専門的な知識にも触れながら児童の興味・関心を引き出すように、またこの学習が、楽しい体験として記憶に残り、事後の指導にも継続的に生かせるように以下の手立てを考えた。

(主な手立て)

- ・学習のめあてや活動の流れがわかり、事後の学習にも使えるしおりの使用
- ・クイズ形式による問題提示
- ・ルーペ、双眼鏡など観察用具の積極的な活用
- ・子どもたちの質問やつぶやきを拾いながら進める対話型の授業

(3) 学習指導案

出前授業 「津軽富士見湖にいる様々な生き物を見つけよう！」

実施期日 令和元年6月24日

対 象 鶴田町立水元中央小学校4学年（児童数9名）

ね ら い つがる富士見湖パークに生息する動植物の特徴やつがる富士見湖の歴史について知る。

郷土館の手立て

- ・活動の流れがわかるしおりの使用
- ・クイズ形式による問題提示
- ・ルーペ、双眼鏡の使用
- ・子どもたちの質問やつぶやきを拾いながら進める対話型の授業

本時の学習活動

教師の働きかけと児童の活動	郷土館職員の動きと留意点
1. あいさつとめあての確認	・しおりを配布する。
つがる富士見湖パークにすんでいる動植物の特徴やつがる富士見湖についてくわしく知ろう。	
2. 自然観察・園内散策 ①ベゴニアの花だん ～ 観音堂方面 ②鶴の舞橋 ～ アイリスの小径方面 ③丹頂鶴 ～ 駐車場方面 【植物】 ・ヤマグラ ・ガマズミ ・ツタウルシ ・ナワシロイチゴ ・ヒメジョオン ・ノハナショウブ ・シロツメクサ ・ヘラオオバコ ・ニワトコ ・ノブドウ ・コメガヤ ・オオキンケイギク 【動物】 (昆虫) ・アオイトトンボ ・アキアカネ ・シオカラトンボ ・ルリシジミ ・スジグロシロチョウ ・ミドリシジミ (鳥) ・カワウ ・トビ ・ワラヒワ ・シジュウカラ ・ハクセキレイ・カンムリカイツブリ	・触れると危険な植物など注意点を確認する。 ・ルーペ及び双眼鏡の使い方を確認する。 ・これまでどんな植物や動物を見たことがあるか経験を元に発表させる。 (しおりの写真を参考にさせる。) ・観察したり解説を聞いたりしたりしてわかったことなどをメモさせる。 ・児童からの質問に答える。 ・触ることができるものには触らせる。
3. 鶴の舞橋・つがる富士見湖について知る ①津軽富士見湖の成り立ち ②屏風山の歴史	①は廻堰大溜池の成り立ちと現在の農業用水について ②は津軽信政による新田開発について
4. 学習のまとめと感想発表	・クイズ形式にして楽しく解説する。

(4) しおり（ワークシート）



図1 表紙・裏表紙



図2 P1・2



図3 P3・4



図4 P5・6



図5 P7・8

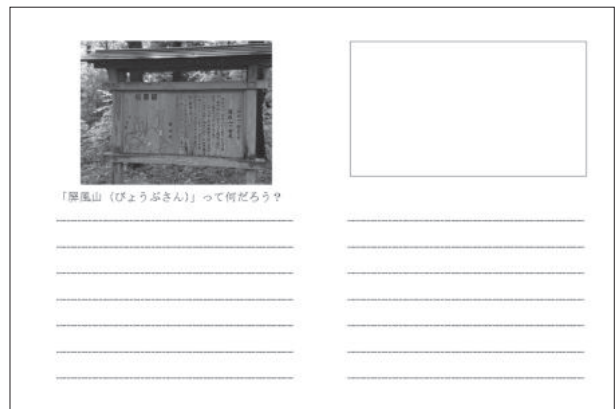


図6 P9・10

(5) 成果

学校の先生方からは、「ルーペなどの観察用具を使いながら体験できたので、子どもたちは生き生きと楽しく活動できた。」「しおりが事後指導にも活用できる内容でよかった。」「説明がわかりやすかった。」などのご意見をいただいた。

自然観察をベースとした内容であったが、地域に関係する歴史や用語などにも触れながら学習できたことは、一つの授業で複数のテーマを横断的に学習する新たな授業を開発する上で、大いに参考となる実践であった。

～授業の様子～



写真1 ルーペを使った植物の観察



写真2 屏風山についての解説



写真3 野鳥の観察

3. 教室と郷土館を結んだ遠隔授業の実践

(1) 遠隔授業について

平成29年に告示された新学習指導要領では、「教育課程の実施に当たって地域の人的・物的資源を積極的に活用するなどして、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させるなど、‘社会に開かれた教育課程’の実現」が求められている。学習内容について専門的な知識をもっている専門家が、外部講師として授業に参加することで、学習内容の幅を広げたり、児童生徒の興味・関心を高めたりすることが期待できる。博物館はこの要求に応えなくてはならない。

しかし、地理的・時間的環境、児童・生徒の実態など様々な事情により、社会教育施設を訪問したり専門家を招いたりすることが難しい場合も少なくない。このような中、平成31年3月、文部科学省から「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策（中間まとめ）」が発表された。その中で、「子供の力を最大限引き出す学びを実現するため、ICTを基盤とした遠隔技術などの最適な先端技術を効果的に活用していくこと」が示された。ICT活用のメリットの一つとして、距離にかかわらず相互に情報の発信・受信ができることが挙げられ、外部講師の派遣や複数人での話し合い活動が困難な場合の方策として有効であると言える。

（２）実践までの経緯

今回、依頼を受けた青森県立青森第一養護学校では、生活単元学習において「青森県をくわしく知ろう」をテーマにして学習しており、生徒が疑問に思ったことへの回答や専門的内容の解説を継続的にできないかという要望があった。

肢体不自由の生徒が、学習の経過に合わせて複数回来館することは事実上不可能であり、限られた授業時間内により効果的な学習ができるよう、インターネットを活用した遠隔授業ができないか、学校側と検討を続け実践に至った。

（３）学習の流れと留意点

学芸員をゲストティーチャーとして位置づけ、生徒の質問にリアルタイムで答えるという流れで授業を展開した。

質問は事前に提出してもらい、活用する展示資料を学芸員間で検討し、必要な解説資料やパネルを作成してから授業に臨んだ。

（主な質問内容）

縄文時代に関するもの

- ・大きな掘立柱はどのようにして立てたのか。 ・縄文時代の家の中はどのようにになっているのか。
- ・縄文時代の人たちはどのようにして獲物を捕っていたのか。

りんごに関するもの

- ・青森県はなぜりんごの名産地となったのか。 ・蜜の入ったりんごが甘いのはなぜか。
- ・りんごはなぜ赤く見えるのか。

（４）成果

学校の先生方からは、「生徒の学習意欲の向上が見られ、事後の学習への動機づけにもつながった。」「専門的な知識をわかりやすく解説してもらうことで、より質の高い授業を実現することができた。」「相互の表情が伝わり、少人数学級の孤独感や不安感を軽減させることにつながった。」などの意見をいただいた。

郷土館としては初の試みであったが、事前に接続テストを繰り返していたので、当日は通信上のトラブルもなく安定して進行できた。また、他分野の担当者と準備物や説明内容などを綿密に打ち合わせた結果、時間内に効率的且つ効果的な解説をすることができた。

～授業の様子（写真４、５考古展示室 写真６りんごと青森県展示室）～



写真4



写真5



写真6

４ おわりに

今回実践した出前授業と遠隔授業は、ともに事後の学校側からの評価も高く、今後も実施したいという意向もあり、学習のねらいを概ね達成できたと言える。ただ、一方で来館して博物館という「環境」「空間」で学ぶということの価値も伝えていく必要がある。博物館には学校では得られない非体系的で自由にものごとにかかわることができる場、という側面があり、出前授業や遠隔授業で学習が完結してしまうのではなく、子どもたちに生涯にわたり博物館を活用し学び続ける意欲をもってもらうための働きかけも忘れないでおきたい。